

農林水産技術ニュース

このニュースは、社会的関心が高いと考えられる農林水産業の研究成果を中学、高校生向けに分かりやすく情報発信するものです。

〒100-8950 東京都千代田区霞が関 1-2-1 農林水産省 農林水産技術会議事務局 <https://www.affrc.maff.go.jp/> 本紙記事、写真などの無断転載、複製を禁じます



(写真はすべて農研機構提供)

水田でスズメの観察をしている農研機構の山口恭弘さん



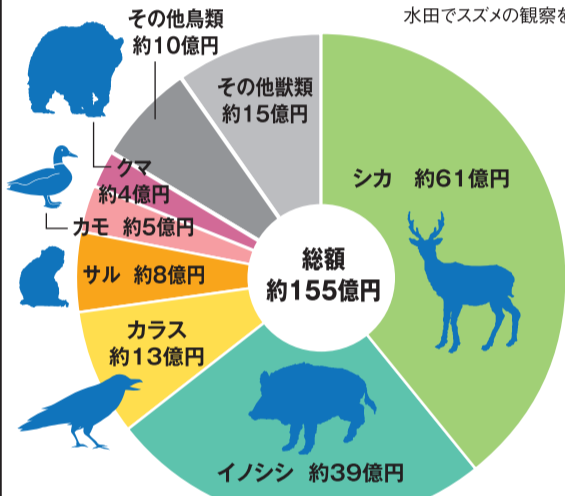
農業における鳥獣害の現状と対策

鳥や獣が農作物を食べてしまったり、農地を踏み荒らしたりする「鳥獣害」。今、農地では何が起きているのでしょうか。農研機構畜産研究部門・動物行動管理グループで鳥の研究をしている山口恭弘さんとイノシシの研究をしている平田滋樹さんに聞きました。

農業に大きな影響を与える鳥獣害

鳥の研究者、山口恭弘さんは「鳥や獣に家庭ごみを荒らされた、家や学校の敷地に大量のフンを落とされたといった経験はありませんか。これも広い意味では鳥獣害です」と鳥や獣がとても身近な存在であることを話します。

また「農業において、野生の鳥や獣が果樹や野菜、稲などの農作物を



※その他鳥類とは、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリなど
 ※その他獣類とはアライグマ、ハクビシン、タヌキ、カモシカなど
 出典:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和3年度)」農林水産省

食べてしまう鳥獣害にあつと、収穫量が減ってしまいます。対策設備や作物の植え直しが必要になれば、生産コストが大きくなります」とも。

出荷量の減少や生産コストの増大は、販売価格の上昇につながることもあり、農業における鳥獣害は、私たちの生活にも影響がおよびます。

鳥獣害が発生する要因の一つとして、銃を使って狩猟をする人の減少、農業の機械化、山と平地の間にある農業地域「中山間地域」の過疎化などにより、人が農地にいる時間が減り、鳥や獣が農地に近づきやすくなったことが考えられます。

山口さんたちがつくった「鳥獣害痕跡図鑑」を中面で紹介しています

獣害対策の基本

人里に来るシカやイノシシなどの獣への対策



農研機構の平田滋樹さん。背後のオリはイノシシをおびき寄せて捕獲する「箱わな」

について、イノシシの研究者、平田滋樹さんは三つのポイントを教えてくださいました。

「基本的な対策は、①柵を設置して入られないようにする侵入防止対策、②里山の整備などによって寄り付きにくくする生息環境管理、③どうしても増えすぎたものは捕獲する個体群管理です。これらを地域ぐるみで総合的に行うことが重要です」と平田さん。

特に三つ目の個体群管理については、「獣害対策の中で多くの人が負担に感じるのが捕獲です」と言います。捕獲の

手順は、動物の習性を考慮した場所に、様々な機材を設置。そしてわなの見回りをし、捕獲した動物を殺処分して適正に処理するというものです。



農研機構は農業、畜産、食品分野の国内最大の研究機関です。茨城県つくば市に本部があり、全国に拠点があります。

農研機構 <https://www.naro.go.jp/>

平田さんたちが開発した「ICT捕獲機材」を中面で紹介しています